

# 東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	第13回東邦大学医療センター佐倉病院学術集会(東邦医学会分科会)
作成者(著者)	東邦大学医学会編集委員会
公開者	東邦大学医学会
発行日	2021.06.01
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 68(2). p.89 91.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	学会抄録(分科会)
著者版フラグ	publisher
メタデータのURL	<a href="https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD67510597">https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD67510597</a>

## 第13回東邦大学医療センター佐倉病院学術集会 (東邦医学会分科会)

2020年10月31日(土)

東邦大学医療センター佐倉病院 7階講堂・1階講義室

開会の辞 副院長 龍野一郎  
 病院長挨拶 病院長 長尾建樹  
 学長挨拶 学長 高松 研  
 医学部長挨拶 医学部長 渡邊善則

### 2. 喀血をきたして増悪した原因不明の慢性呼吸不全の一例

○黒瀬泰子(初期研修医室)  
 岩崎広太郎, 若林宏樹, 塩屋萌映, 早川 翔  
 吉田 正, 力武はぎの, 熊野浩太郎, 松澤康雄  
 (呼吸器内科)

### セッション1 臨床研修の成果

座長 岡住慎一/武城英明

#### 1. 蛋白漏出性胃腸症により全身性浮腫を来した一例

○大野瑠衣子(初期研修医室)  
 山田哲弘, 内藤大輔, 関 駿介, 西宮哲生, 木村道明  
 大内祐香, 古川潔人, 柴本麻衣, 岩下裕明, 宮村美幸  
 佐々木大樹, 菊地秀昌, 中村健太郎, 松岡克善  
 (消化器内科)

症例: 56歳男性. 17年間持続する全身性浮腫があり, 全身精査行うも異常所見なく特発性浮腫の診断で利尿剤による加療をされていた. その後, 徐々に利尿剤への抵抗性や低蛋白・低アルブミン血症, 下肢浮腫の増悪が見られ, 原因検索目的に当院消化器内科に入院となった. 腹部単純CTで広範な小腸壁の肥厚,  $\alpha$ 1-ATの便中クリアランスの上昇を認め蛋白漏出性胃腸症の診断となった. また上部小腸内視鏡検査で生検した小腸粘膜の病理結果で好酸性胃腸炎の診断となり, プレドニゾロンの加療を開始したが著効はしなかった. 蛋白漏出性胃腸症の原疾患は極めて多彩であり, 近年では膠原病などの自己免疫機序を疑わせる症例報告が目立っている. 以前に比べ診断は容易になってきたが, その病態や蛋白漏出の機序に関してはいまだ不明な点も多い. 本症例の病態, 病因について文献的考察を含めて報告する.

53歳男性. 約7年前からの血痰と原因不明の慢性呼吸不全を認めていたが精査希望なくHOTの導入のみされていた. その後急激な呼吸不全増悪と喀血を認めて入院となった. 血液検査では炎症反応・KL-6の上昇を認め, 膠原病に対する各種自己抗体は陰性であった. 胸部造影CTでは喀血を来すような異常血管はなく, 全肺野に広がる非区域性びまん性すりガラス影と気腫性変化を認めた. 心臓超音波検査・心臓カテーテル検査で肺高血圧症や心不全所見は認めなかった. ステロイドに良好に反応し, 呼吸不全, 喀血が改善したため退院した. BALでヘモジデリン貪食マクロファージを認め, ステロイドに反応した経過と除外診断から特発性肺ヘモジデローシスと診断した. 退院後はステロイドを漸減していたが再燃あり, 小児例では有効と報告があるアザチオプリンも併用して大幅にステロイドを漸減する事ができた. 特発性肺ヘモジデローシスの成人例は稀であり文献的考察を含めて報告する.

#### 3. 当院で取り組む初期研修医の働き方改革について

○佐藤俊哉, 森 朋子, 押田千絵里, 蛭田啓之  
 松岡克善, 龍野一郎(教育支援室)

当院は厚生労働省指定の「基幹型臨床研修病院」として初期研修医の育成を行っている. 初期研修医は医師としての研鑽を積む「学習者」としての側面を持つ一方, 研修病院と雇用関係を持つ「労働者」でもあり, 労働法令の規制

を受ける。

2019年4月から働き方改革法案が施行され、多くの職種は月45時間・年間360時間が時間外労働の上限となったが、医師および初期研修医は応召義務等の特殊性を踏まえ、2024年度からの適用になった。5年の猶予が与えられたものの、2024年度から開始される時間外労働時間上限規制に向けて、臨床研修病院は初期研修医の労務管理が求められていることから、今回、我々は佐倉病院初期研修医における勤務状況の把握と時間外勤務時間短縮に向けた取り組みを行ったので報告する。

## セッション2 臨床医学の進歩①

座長 鈴木啓悦/長島 誠

### 4. ロボット支援手術の概説と当院の初期成績

○宋本尚俊 (泌尿器科)

2020年9月、佐倉病院に手術支援ロボット「ダヴィンチ」が導入された。ダヴィンチを用いることで、従来の腹腔鏡手術のメリットに加え、3Dの高精細拡大映像による視認性、人の手以上の鉗子の可動域による操作性、手振れ防止機能による正確性の向上といった利点が追加され、より低侵襲で精度の高い手術を可能とする。佐倉病院では9月末よりロボット支援腹腔鏡下前立腺全摘除術を開始している。ロボット支援手術とはどのような手術であるのかについて解説するとともに、当院における初期治療成績について報告する。

### 5. COVID-19 我々は如何に対応したか？

○松澤康雄, 岩崎広太郎, 若林宏樹, 塩屋萌映  
早川 翔, 吉田 正, 力武はぎの, 熊野浩太郎  
(呼吸器内科)

2020年がこんな年になると、誰が予想したか。COVID-19のパンデミックは、多くの人命を奪い、多くの人生をかえた。町から人が消え、マスクも消毒薬も消えた。1月24日、WHOが緊急事態宣言を見送った日、院内で、緊急の対応を開始した。当院には、感染症専門医も救急専門医もおらず、発熱者用の外来も、陰圧室すらない。しかし、当地域において、複数の呼吸器内科医がいるのは、当院のみ。逃げる選択肢はない。3月になり、イタリアはじめ、欧米諸国の惨状が伝わってきた。感染対策室とともに、必死で対応を考えたが、PPEが急速に枯渇していった。最悪の状況の中、救いだっただのは、医師も看護師もコメディカルも、誰も逃げず、院内のすべての部署が協力的であったこと。何もエビデンスのない中、アピガン+ステロイドを治療の

中心にしようと決めた。以上、当院の経験を、若干の論文レビューとともに報告する。

### 6. 食欲中枢異常による難治性高度肥満症の実態調査～龍野班 J-SMART 研究～

○齋木厚人, 龍野一郎 (糖尿病・内分泌・代謝センター)  
大城崇司, 岡住慎一 (消化器外科)  
林 果林, 桂川修一 (メンタルヘルスクリニック)

スリープ状胃切除術は著明な減量や代謝改善をもたらすが、十分な効果がない例もしばしば経験する。その患者背景や術後成績を調査し、診断基準を策定することを目的に、東邦佐倉病院を中心とした学会認定10施設によるJ-SMART Groupが結成された。対象は322名(119 kg, BMI 44, HbA1c 7.1%)。2年間の総体重減少率(%TWL)は29.9%、糖尿病寛解率(HbA1c 6.0%未満かつ糖尿病薬なし)は75.6%と、全体平均では良好であった。糖尿病寛解に対する%TWLのcut-off値は20.8%で、それ以下では寛解率が低下した。また精神疾患の有病率は26.3%であったのに対し、%TWL 15未満では46.9%と高かった。この%TWL15未満は糖尿病の寛解率が悪く、摂取エネルギーの増加があり、精神疾患や知的障害の頻度が高い集団で、患者数は約1万人と推定された。本研究は外科治療の有効性を示すとともに、外科治療を施行してもなお難治例が存在すること、その集団は糖尿病の改善も悪く、精神心理や小児医療、効果的な薬物治療の課題があることを明らかにした。

### 7. DMAT 資機材を用いた日常診療：ポケットエコーによる胸腔内癒着の術前診断

○佐野 厚 (呼吸器外科/DMAT)

【背景】当院のDMATはポケットエコーのVscan Dual Probeを保有しているが、2019年水害時までには使用されていなかった。このエコーを日常診療に使用すべく開胸手術例で胸腔内癒着の術前診断を行った。

【方法】2019年9月～2020年8月の開胸手術例61例を対象とした。リニアプローブを用いて胸膜のsliding signによって癒着の有無を検索した。

【結果】sliding signありは57例で、うち55例で癒着は見られなかった。sliding signなしは4例で、うち3例で癒着が見られた。エコー所見との不一致は、ゆるい癒着でsliding signが見られた2例と、COPDのためsliding signの観察が難しかった1例であった。

【結論】ポケットエコーは胸腔内癒着の診断に有用である。DMAT隊員として災害時に使用できるように平時よりDMAT資機材を使用して操作に習熟しておく必要がある。

## セッション3 臨床医学の進歩②

座長 高橋初枝/増田雅行

### 8. ポータブル撮影時における室内空間線量分布測定

○竹谷 明, 増田由佳梨, 山田夏穂, 佐川綾菜  
石田 悟, 戸澤光行 (中央放射線部)  
寺田一志 (放射線科)

【目的】胸部ポータブル撮影時の空間線量分布を測定する。

【方法】寝台にファントムを設置し, 80 kV, 1.6 mAs, SID 100 cm, 照射野大角にて, 照射野中心を 50 cm 間隔, 床面から 100, 150 cm の計 160 点の空間線量を測定した。

【結果】照射野から離れるほど線量が低くなった。また高さ 150 cm の時に 100 cm の時よりも中心領域を除いて線量が高くなった。最大線量は高さ 100 cm の時 1.533  $\mu$ Sv, 高さ 150 cm では 0.986  $\mu$ Sv となり, いずれの高さでも 2 m 離れると 0.1  $\mu$ Sv 以下となった。

【考察】高さ 100 cm の方が中心領域で線量が高いのは線束の影響だと考えられる。今回検出された線量による人体への影響・リスクを不安視する必要はないが, 放射線利用の大原則である防護の最適化を十分に考え, 退出可能な人は退出し被曝する人数を減らし, 距離をとる, 遮蔽物の利用で被ばく量を減らすことが重要である。

### 9. 高齢心不全患者における血管弾性能 Cardio-Ankle Vascular Index と身体機能

○小川明宏 (リハビリテーション部,  
埼玉県立大学大学院保健医療福祉学研究科)  
寺山圭一郎, 秋葉 崇, 寺本 博, 土谷あかり  
久保田千恵, 藤田悠華 (リハビリテーション部)  
丸岡 弘 (埼玉県立大学大学院保健医療福祉学研究科)  
清水一寛, 中神隆洋, 清川 甫, 岩川幹弘 (循環器内科)  
白井厚治 (みはま病院内科)

近年, 高齢心不全 (HF) 患者が急増し, より詳細な現状分析およびその対策が求められている。加齢による問題は種々の疾患増加のみならず, 身体機能の低下, 血管の硬化, 認知機能の低下など多々ある。佐倉病院の心臓リハビリ

テーション (CR) チームでは, 2017 年より CAVI を用いた血管機能, 超音波による心臓機能, 身体機能等を評価している。今回, CR データベースを基に身体機能と血管弾性能の関係を明らかにする目的で研究を行い, International Heart Journal に報告した。

概要は, 入院中に CR 実施した 65 歳以上の HF 患者 100 例の Sarcopenia 合併状況を検討し, CAVI 等の指標を比較した。また CAVI と身体機能や超音波検査など各指標の関連性を検討し, CAVI の寄与因子を検証した。結果として, Sarcopenia (+) は 47 例であり, Sarcopenia (+) は有意に CAVI 高値を示した。また CAVI は年齢や身体機能と相関し, 6 分間歩行距離が CAVI の寄与因子であった。

高齢 HF 患者の血管弾性能の改善には, 全身的な運動機能の向上が有用なことが示唆された。今後より良い心疾患対策の構築に向け, 患者一人一人の状態を観察し, 佐倉病院のオリジナルデータを発信していけるよう努めていきたい。

### 10. 臨床における看護師の清潔ケアの視点

○船曳春花, 中村澄香 (看護部 (6 階西病棟))

本研究は, 病棟看護師がどのような視点で清潔ケアを考え, どのような思いがあるのかを明らかにすることを目的に研究を行った。対象者 6 名に対してインタビューを実施し, その結果, 清潔ケアの視点は視覚的情報のみならず, 身体的・心理的側面から患者を全体的に捉え清潔ケアを考えていることがわかった。行われている清潔ケアに対しては, ケア不足や患者に合ったケアができていないという思いが多くあり, 清潔ケアに対して満足や適切であると感じているとは言い難い。また, 清潔ケアが必要だと思っても, 業務量の多さや看護師と患者間の意見の相違などがあり, 患者に必要なと思う清潔ケアができないことで, 看護師は清潔ケアに対して多くの葛藤を抱えていることが明らかになった。

### 総評: 「学長賞」「医学部長賞」「院長賞」の発表

学長, 医学部長, 病院長

### 閉会の辞

副院長 龍野一郎